

望岳山荘

に



中嶋 嶺雄

文部科学省の中央教育審議会ではこのところ、教育基本法の見直しと教育振興基本計画についての審議が続いており、三月末の最終答申に向けて、基本問題部会を中心に大詰め段階にさしかかっている。教育は国家百年の計だから、答申を基に国会でも広く国民のあいだでも、活発な論議が起ころうとしているのである。

昨年十一月の「中間報告」にあった「日本人としてのアイデンティティ」は「日本人であること」と表現され、論議の多い「愛国心」にかんする部分は「郷里や国を愛する心」と表現されることになるが、郷土愛を愛国心の原点にするのは、開かれたナショナルリズムへの水路にもなり得るので、妥当な表現だといえよう。要はその国や社会に民主主義と個人主義が根

づいているかどうかであって、ファシズムや軍国主義の時代の愛国心とは時代環境が根本的に異なっている。ところで、郷里を愛する心を培ううえで、『市民タイムス』はきわめて有無なメディアだといえよう。本紙が去る三月七日で二万号に達したことは喜ばしいかぎりだが、「広域コミュニティ紙」としての本紙が、地域

立脚型メディアであると同時に、郷里と国際社会をつなぐ報道(友好姉妹都市関係や国際音楽交流、留学生問題、英語教育など)にも丹念に紙面を割き、つねに世界に視野を開いてきたことが、その生命力になっている。『市民タイムス』の目指す方向と軌を一にしているといえよう。『市民タイムス』の目指す方向が、早稲田大学などわが国のいくつかの大学がグローバルズムばかりかローカルズムにも着眼して「グローバルカル」を標榜したり、上智大学なども地域立脚型のグローバルズム研究拠点(COE)を形成しようとしている。国際的な学術研究都市を目指す北九州市には、昨年、

郷里や国を愛する心

な拠点として北九州市立大学大学院社会システム研究科(博士課程)が開設された。平成春に、世界的に受発信する公立の国際教養大学が秋田県に発足する。いずれも地域と国際社会という視点からのものである。そのような視座が確立されてはじめて、「郷里や国を愛する心」が意味をもつのであろう。

(国際社会学者 松本市出身)